思い川

後藤明生

講談社

思い川
一九七五年二月二十四日　第一刷発行
著　者　後藤明生
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　有限会社文信社
© Goto Meisei Printed in Japan 1975

定価はカバーに表示してあります。　(文1)

目次

父への手紙　5
釈王寺　95
父の夢　123
思い川　157

裝幀·秋山法子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

思い川

父への手紙

お父さん、あの戦争が終ってからもう二十七年になります。ということは、お父さんが死んでしまってから、二十七年になるということです。

お父さん、わたしがあなたのことを「お父さん」と呼ぶのは、はじめてです。まったく生まれてはじめてのことです。わたしはついに、あなた自身に向って「お父さん」と呼びかけたことはありませんでした。中学一年生までのわたしはあなたを「父ちゃん」と呼び、そして現在では、「死んだおやじ」と呼んでいるからです。

お父さん、いや実は、「父上」という呼び方も考えてみました。しかし、結局それをやめることにしたのは、わたしは現在、お母さんのことを「母上」とは呼んでいないからです。お母さんは今度の六月で六十七歳になります。それから、もうひとつ「父上」をやめた理由は、わたし自身がいまや二人の子供から、「お父さん」と呼ばれておるからです。

わたしは今年の四月でとうとう四十歳になりました。もっとも現在は満の計算ですから、お父さんが死んだ数え年の四十七歳よりは、六歳若い年齢ということになります。わたしの長男は満十歳ですから、わたしがお父さんの死んだ年になると、満十六歳。これは、ちょうどお父さんが死んだときの、兄の年齢に当るのではないでしょうか？　いや、これはいまはじめて気付いた、まったくの偶然です。幹雄兄はあのとき中学四年生でした。これはおどろきました。

現在では、日本人の男の寿命は平均七十何歳だかに延びているそうです。その勘定通りですとわたしはあと三十何年間か生きていることになるわけですが、それでも一瞬、すうーっと首筋のあたりが冷たくなったようです。

ところでお父さん、唐突ですが、永興警察署の警察官だったS老人をご記憶ですか？お父さんがまだ独身者だったころの剣道仲間です。もちろんS老人も当時はお父さんと同様、独身者だったわけですが、わたしはそのS老人に会ってきたのです。もう一月半くらいになりましょうか。三月も終りの二十九日でした。もちろん、生まれてはじめてのひとです。S老人は大変お元気でした。現在、七十四歳だそうですが血圧は百四十幾つかで、きわめて良好だと医師からもほめられているそうです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もっとも、こういうことを話しておられました。

「こないだの晩ですよ。テレビを見ておりますとね、コメカミのあたりにピイピイと痛みが走るんですね。こりゃあ風邪でも引いたんかなあ思いまして翌朝、近くの内科へ行って血圧をはかると、百八十もあるというじゃありませんか」

そのときS老人は相当ショックを受けたようです。なにしろ、それまでの血圧は、百四十と七十であったからだそうです。しかし、わたしが感心したのは、S老人がそれから数日後、もう一度別の病院で血圧の測定を受けていることでした。S老人の話によれば、こうです。S老人は、数日後、座骨神経の注射のため別の病院へ出かけて行きました。この座骨神経の話はあとで詳しく出てきますが、S老人はその注射を受けに行った病院で、念のためもう一度血圧を測定したわけです。

「血圧の方はどうなんですか？」

とS老人はそこの医師からたずねられたそうですが、わたしに面白いと思われたのは、そのときS老人が数日前に百八十であった血圧のことを、医師に報告しなかったところです。

「さあ、そういえばお宅ではまだ測っていただいておりませんが」

とS老人は答えたそうです。

「じゃあ測ってみましょう」

そして再度測定した結果、S老人の血圧は百四十幾つかに過ぎなかった、ということです。医学的にそういったことがあり得るかどうか、よくはわかりませんが、わたしはS老人の、そのような何喰わぬ態度を面白いと思いました。また、そのような慎重さこそ、今日七十四歳にしてなおあのような健康さを保持できている大きな原因ではなかろうか、と考えた次第です。

生まれてはじめて会ったS老人の健康ぶりが、何よりもまずわたしの印象に強く残っている理由は、わたしが、いわばおそるおそるその人を訪問したせいかも知れません。三月に入ってから間もなく、わたしはS老人あてに一通の速達便を出しました。文面は、今度、おふくろたちの住んでいる福岡へ帰る用事ができたので、その途中、是非ともお立寄りしてご挨拶を致したい。その折、亡父の思い出話などもおきかせいただけたら、誠に幸甚です、といった、きわめて平凡なものですが、折返しS老人から次のような返事をもらいました。

「弥生三月、仰せの通り野も山も春めいて参りました。外出先から帰宅しましたら懐しい

貴殿からのお手紙、誠に有難たうございました。山口圓蔵さん田中さん、お二人共殊に懇意にして居りました方です。扨て、早速ですが私は十二年ぶりに座骨神経を病み（永興警察署時代、柔道で尾骨を強打したのが原因）毎日注射通ひ、それに上の歯が全部抜けましたので上だけ総入歯にせねばならないことになりましたので、内科が済んだら歯科へ廻つて帰宅して居ります。斯様な次第で御多忙の処わざわざお立寄り願つても御案内することも出来ない様なことなんです。福岡の方へはこれからもお出掛けになる機会も度々あることと思ひますので次回福岡へお出掛の際は是非お立寄り願ひますよ。歯抜けでその上腰が痛いのでは充分な御案内が出来ないかと思ひますので次回は必ずお立寄り下さいます様、今からお願ひ致しておきます。私は老妻と二人だけです。二階六畳二つ、四畳半一つ空いて居りますからユックリ滞在して下さい。何もお構ひしませんから心おきなく御滞在下さい。駅まで出迎へに行きますからその際は亦、事前に詳しいことをお知らせ下さい。お互ひに顔がわかりませんので、一見して解る様なこと、例へば服装や持物等のことなどをお書き添へ下さいませ。私宅は山陽本線横川駅から歩いて十五分位ですが、横川駅は急行が停車しませんから矢張り広島駅といふことになりますネ。本年三月限りで十五、六年勤めてきた町内会のこと、老人クラブ世話人を一切やめる覚悟で居ります。体調不良を理由

に。では次回福岡行の際是非お立寄り下さることをお約束して。さよなら、草々」

この、朱色の野紙裏表に細かい文字がぎっしり書き込まれている速達の封書をもらってから、わたしは一週間ほど考え込んでしまいました。

いったいS老人とわたしとの関係とはいかなるものであったのだろうか？

わたしがS老人の存在を知ったのは、一年半近く前のことです。昨年の一月、わたしは某新聞社から一通の封書を受取りました。その封書の中身がS老人からのハガキだったわけですが、その最初のものを含めて、現在までにわたしがS老人からもらったハガキは次の四通です。

「御多忙中誠に恐縮に存じますが、一月十七日付貴紙の『ああこの切なる大陸への望郷』欄に『遙かなる元山沖』を執筆された××××氏の御住所をお知らせ下さい。私は大正九年から十五年間、文中の永興警察署に勤務し筆者のお父さんと警察署の道場でよく剣道をやりました。筆者の曽祖父さん、おばあさん、それに筆者××さんの叔母さん（お父さんの妹）等をよく存じて居ります。私の青春時代を過したなつかしい所です。筆者の××さんは私の事は勿論御存知ないでせう、年代が違ひますから。私も独身時代で剣道での好敵手であつたお父さんのお住ひを是非お知らせ願ひたいのです。私は七十三歳ですが、お

父さんは二歳位私より若かつた様に記憶して居ります。お宅は文房具や日用品等を販売して居られましたので、また警察の真向ひでもあり私もよく出入りしましたよ。お父さんの妹さんは美人で年頃の娘さんであつたので、私共若い警察官の憧がれの的でした。御多忙中誠に恐れ入りますが御一報願ひます。敬具」

「お便り有難たうございました。大正九年から昭和七年に咸興へ転出する迄永興に居りました。七十三歳の今日でも私の人生中一番思ひ出の多い土地です。永興に来たのが二十三歳でした。城里、長興、馬場にも勤務しましたが殆んど本署勤務でした。亡父さんとは毎日の様に退庁後、道場で剣道をやりました。祖母さん、妹（叔母）さんも次々と他界されたとのこと、心から亡くなられた皆さんの御冥福をお祈り致します。私は女の子一人だけですが嫁にやりましたので家内と二人だけで老後を送つて居ります。閑人ですので十数年来町内会の世話を致して居ります。幸ひ二人共病床に伏したこともなく、元気で余生を楽しんで居ります。広島へお出の機会が有りましたら何卒お立寄り下さい。皆様お元気で、サヨナラ」

「賀正。本年もお元気で御幸福の程心からお祈り致します。私たちも恙なく越年致しました。七十四歳と七十二歳の老爺、老媼となりました」

「お便り有難たうございました。大阪のお兄さんも、福岡のご兄弟たちも皆さんお元気でお仕事にご精進のこと、何より嬉しく存じます。亡父規矩次さんもさぞかしご満足のことでございませう。福岡のお母様はお元気でお暮しですか。賀状を差し上げましたがお便りが有りませんので御元気か否か気にかけてをります。お序の折何卒よろしくお伝へ下さいませ。一年志願の若き元気な少尉殿に対し独身の若き警察官であった私。剣道ではお互ひに好敵手であり仇敵でもあった二人の仲。思ひ出は尽きませんネ。当時は美少年？　の私も七十四歳の爺となりました。ではお元気でネ、サヨナラ」

わたしはその四通のハガキを何度も読み返してみました。確かに最初にハガキを寄越したのはS老人の方でした。そのハガキによってわたしはS老人の存在を知ったのです。しかし、そのことによってS老人とわたしとの関係が成立したと考えたのは、わたしの一方的な解釈だったというべきかも知れません。一通目のハガキをよく読んでみると、S老人が求めていたのは、わたしの住所ではなく、お父さんの住所だったからです。求められていたのはお父さんであり、わたし自身ではなかったわけです。S老人をして筆を執らしめたものは、お父さんへのなつかしさだったのです。S老人はなるほどわたしの住所を新聞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com